
ショートショート集『不明の小噺』

蟬ノ河

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ショートショート集『不明の小噺』

【Nコード】

N2306R

【作者名】

蟬ノ河

【あらすじ】

ショートショートの詰め合わせですが、ただ読んでも意味が分かりません。わからないように書いています。

後書きに解説を載せていますので、後書き含めて一話とってください。

後書きを読む前に、こういうことか考えて読むと、水平思考の推理っぽいことも出来ます。

ダーク、ホラー、オカルト、神話、ギャグなど様々なジャンルの小噺を書き連ねていきます。

1、綺麗好きな彼女

わたしはとっても綺麗好き。

髪の手入れは念入りにするわ。

毎朝のシャンプーを欠かしたことはないの。

シャンプーを左手につけて、念入りに泡立てながら髪を洗う。

きちんと時間をかけて念入りに洗う。

学校に間に合わなくっても関係ない。

わたしは一時間目の授業より、髪のお手入れの方が大事なものの。

せつかく一人暮らしをしてまでして通っている学校だけど、それでも毎朝のシャンプーには代えられないわ。

しゃかしゃか髪を洗っていると、ちょっと気が付いた。

うーん、どうしよう。

少しシャンプーが足りない気がする。

わたしは前かがみのまま、手探りでシャンプーを探した。

左手にそれらしいものが当たったので、わたしはシャンプーを足して、洗うのを再開した。

目をつぶったまま、じっくりと髪を洗い続ける。

シャワーの音だけが洗面台に響いている。

わたしはとっても綺麗好き。

1、綺麗好きな彼女（後書き）

初めにシャンプーは左手につけました。

つまりシャンプーを持ったのは右手です。

二度目にシャンプーを持ったのは左手。

右手側においたシャンプーを、前かがみのまま左手で取るのは不可能です。

つまりシャンプーを動かした者がいるのです。

一人暮らししている彼女の、すぐ背後に。

2、殺し屋ジョニー

俺の名前はジョニー。

殺し屋だ。

言っておくが、そんなじょそこいらの雑魚といっしょにしてもらっちゃ困る。

殺した奴は100人は下らない。超一流の殺し屋だ。

俺には相棒がいる。そいつの名前はダイナマイト・マリー。

殺しの腕は俺よりも劣るが、なにかと頼れる女だ。

そして今日、俺は何度目かの殺人をする。

ターゲットはなんと、俺の実の母親だ。

ガキのころから口うるさく俺をしかり、時には痛めつけたババアだ。

もう70近い。

だが年相応に金を溜め込んでいるらしいので、俺は一思いに殺して、その遺産を頂くことにした。

流石にこのことはダイナマイト・マリーには言っていない。

母親を殺すなんて、言えるわけない。

それにこれは殺しの依頼じゃなく、俺の私怨と私利私欲の為だ。

その夜。グッスリと眠っているババアの頭に、サイレンサー付きの銃をズドン。

ババアは海老みたいにビクンとはねて、すぐに動かなくなった。

楽勝だ。

これで遺産は俺のもの。

と、そこまでは良かったんだが、俺はあることに気がついた。

死体をどうするべきか。

俺は考えに考えた結果、とてつもないミスをしていることに気がついた。

2、殺し屋ジョニー（後書き）

ジョニーは殺し屋です。本人の話通り、殺しの腕は超一級です。

ですがそれ以外に何の能もありません。

殺人の依頼を受け、準備を整え、死体を始末して、警察にも手をまわすのは、全てダイナマイト・マリーがやっていました。

殺すだけしか能のないジョニーには、今しがたできた死体进行处理することが出来ないのです。

では大人しくマリーを呼んで助けてもらえばよいか？

それも出来ません。

ダイナマイト・マリーはもうこの世にいないからです。

先ほど死んでしまいました。

ダイナマイト・マリーは、70近いジョニーの実の母親です。

つまりジョニーは数多くの殺人を犯した一流の殺し屋ではありませんが、独り立ちまったくしていなかったのです。

そのことに、ジョニーは母親を殺した時ようやく気がついたのです。

それはもはや取り返しもつかない程のミスです。

3、ワタル君の忘れ物

いよいよ文化祭は明日。

俺たちは喫茶店準備に熱中してしまい、気がついたら外はもう真っ暗になってしまった。

校舎から校門までのは、まったく明りがない。

月もない夜だったので、隣の奴の顔すら見えないほどの暗さだ。

「スッゲー暗いな」

「マジで。ゼンゼン見えねーンだけど」

みんなでワイワイ言いながら校舎を出て、唯一明りがついている校門を目指して歩いていく。

と、そこでワタルが声を上げた。

「やっべ。教室にケータイ忘れた」

一大事とばかりに、ワタルは教室の方を向いた。

「取りに行くのかよ？」

明りがない夜の校舎に入って忘れ物を取りに行く。なかなかスリルのある話だ。

「ケータイがないのなんて、俺は一秒でも我慢できねえ」

ワタルはそう言ったかと思うと、教室に向かって走っていった。

「度胸あんなー」

「ってーか、一秒でも我慢できねーのに、携帯忘れんなよ」

俺たちは笑いあった。一人が大声で、ワタルの走っていった方に声を掛けた。

「むかしー、この辺は墓場だったんだってよー。夜中に教室はいると、呪い殺されるって聞いたぞー！」

本邦初。大声で語り掛ける怪談。

ムードも何もあったもんじゃない。

「おーう！」

ワタルにも聞こえたらしく、元氣のいい返事が返ってきた。

怪談とはいっから大声で返事するものに変わったのだろうか。

しばらくみんなで校門に歩いたが、校門まで行っではワタルの様子がわからなくなる。

適当なところで立ち止まって、様子を見ていた。

「おせーな」

「何してんだ？」

「呪い殺されたりしててな」

笑い話だったが、意外なほどにワタルが遅いので、みんな本気で心配になってしまった。

じっと黙って様子を見ていると、ようやく三階の教室の明りがついた。

「着いたか」

俺は安心し、小声で呟いた。

しばらくしてワタルらしき人影が、教室からこちらに向けて手を横に振った。

どうやらこちらを呼んでいる様だ。

「おい、呼んでるみたいだぜ」

「なに呼んでんだよ。まったく。どーする？」

「どうするって、流石に置いてねえだろ」

「呼ばれちゃしょうがねえ。行くか」

「そーだな」

みんなで教室に向かおうとした時、誰かが俺の手を引っ張った。

「なんだよ？」

「み、みんなストップ」

そいつが小刻みに震えていることが、硬く握られた手からわかった。

3、ワタル君の忘れ物（後書き）

暗い所から、明るい所は見えます。

でも明るい所から、暗い所を見るのは不可能です。

ワタル君はどうやって、明りのない所にいる少年たちに向かって手を振ることが出来たのでしょうか？

まったく見えないはずなのに。

しかも三階から手を横に振っただけなのに、少年たちは全員、ワタル君が「教室に呼んでいる」とわかりました。

手招きされているわけでもないのに。

全員がなんら疑問を抱かずに、呼ばれていると確信しています。

そんな事が可能でしょうか？

絶対に不可能です。

人間には。

答えは一つ。

ワタル君はもう人間ではなくなっているのです。

そしてかつてワタル君であった人影は、新たな犠牲者を教室に呼

ぼうとしています。

みんなを引き止めた彼は、それに気がついて震えが止まらなくなりました。

4、ねーちゃんと弟

ねーちゃんと弟が喧嘩した。

まいったー。どうしよう。

もともと誰からも好かれる優等生のねーちゃんと、乱暴な弟はそりが合わなかった。

弟が家を出てた時は我が家も平和だったんだけど、ある日いきなり戻って来た。

やってきたと思ったら酒を飲んで、家中で大暴れ。

ねーちゃんが大切にしているのもバンバンぶっ壊した。

なにをやってるんだお前は！

しばらく我慢してたらまた家を出ると期待してたんだけど、今度はねーちゃんの方がキレた。

優等生のねーちゃんがキレたらなにをするか。

僕はドキドキだったけど、ホントにビックリした。

なんと部屋に引きこもったのだ！

おかけでねーちゃんの仕事の関係者はおお弱り。

もういつそ別の人を頼ればと思うんだけど、ねーちゃんの仕事は、ねーちゃんできならしい。

ねーちゃんめ。それをわかってて、引きこもったな。

優等生は嫌だね。変なところで狡猾でさ。

それで僕としてはどうしようかと思ったけど。

なんかみんなが期待した視線で見てたけど。

べつにどうもしないよ。

期待されることには慣れてないんでね。

歌って踊って、酒でも飲んでりゃ解決するでしょ？

4、ねーちゃんと弟（後書き）

ねーちゃんとは天照大神。あまてらすおおみかみ

弟は須佐之男命。すさのおのみこと

僕こと語り手は月読命です。つくよみ

これは古事記、日本書紀等で語られている神話、天岩戸伝説のことをさしています。

家こと高天原での須佐之男命の暴虐に怒った天照大神は、天岩戸あまのいわとに隠れてしまいました。

そのため世界中の人々は太陽（天照大神）がなくなり困り果ててしまいました。

思金神の一計により、八百万の神々が天岩戸の前で宴を開くこととなりました。

天宇受賣命が桶の上で踊り、それを見た八百万の神々が大笑いしました。あめのうずめ

「神々はわたしが岩戸に引きこもっているのに、なにに笑っているのだろう？」と、不思議に思った天照大神が岩戸から顔を出した時に、天手力雄神が岩戸から天照大神を引っ張り出しました。あめのたじからお

これにより世界に太陽が戻ってきて天岩戸伝説は完結します。

本人の告白どおり、月読命はなにもししていません。

月読命は天照大神や須佐之男命と並ぶ三貴神のはずなのですが、古事記、日本書紀において極端に登場回数が少なく、逸話もない神様です。

なので彼は、「期待されることに慣れていない」と言いました。

5、ジョニーの気球

俺の名前はジョニー。超一流の殺し屋だ。

俺は仕事をする為に、はるばる海を越えて日本にやって来た。

8月の日本は蒸し暑くて最悪だ。さっさと仕事を済ませて帰りた
いぜ。

今回の標的は、ある大金持ちの日本人だ。

男は自分が狙われていることを知っているらしく、外に出るとき
は凄腕のボディガードに囲まれている。

超一流の俺も、流石にそれでは手が出せない。

唯一、男からボディガードが離れるのはビル屋上にある自宅だ
けだ。

もちろん男が自宅で油断するのは理由がある。

男の住むビルは、住宅地のなかで一際目立つ20階建て。

当然、屋上を狙撃できるような別の高い建物は存在しない。

「さて。どうしたものか」

俺は考えた結果、月のない夜に黒い気球を飛ばすことにした。

気球からなら20階建てのビルの屋上だろうが丸見えだ。

月明かりのない夜ならば、黒塗りの気球が目立つことはありえない。

「完璧だな」

天気、風向きも問題ない夜、俺は気球を準備して殺人計画を実行に移した。

今日は土曜日の夜だ。

奴は必ず自宅でのんびりと過ごしているはず。

河川敷きでこっそりと小型気球を膨らまし、俺は大空へと舞い上がった。

5、ジョニーの気球（後書き）

来日したばかりのジョニーは知りませんが、8月の土曜日の河川敷きでは、非常に高い確率であるイベントが催されます。

花火大会です。

ジョニーの黒塗り気球は、夜空を彩る極彩色の花火によって、千人以上の花火観覧のお客に目撃されました。

ジョニーはビックリして、大急ぎで気球を地上におろしました。

もちろん狙撃計画は失敗です。

6、ジョニーと情報屋

俺の名前はジョニー。超一流の殺し屋だ。

とある事情で、俺は今は日本にいる。

今日は情報屋から新しい情報を仕入れる日だ。

だが日本人はみんな同じ顔なので、俺のような白人は非常に目立つ。

一方で、情報屋は目立つの何よりも嫌う。

俺は都内でも外国人の割合が多い秋葉原を、情報屋と会う場所に選んだ。

ここは外国からの観光客によって人種の坩堝と化している。俺が目立つこともない。

一服しながら、俺は情報屋が現れるのを待った。

情報屋は慎重な男だ。

俺が目立つところがあれば、決してその姿を現さないだろう。

俺はその為に、なるべく目立たない地味な服装をしている。

たまに頭がおかしい服装の女がいたりするのは、それがこの街の特徴だと聞いたことがある。よりいっそう、俺が目立つことはない。

俺は情報屋の接触を待った。

「もしもし」

ようやく来たか。

と思ったら、なんとそいつは警察官だった。

まずい。

目立つだけでもやばいのに、よりにもよって警察官に職務質問されてるなんて。

最悪だ。

考えうるべき最悪の事態だ。

まさか不良外国人と思われたか？

いや。日本人は俺のような白人には寛容なはずだ。

そもそも今日の俺はネクタイにスーツ姿で、どこから見ても国際ビジネスマンのはずだ。

怪しまれる要素は一切ない。

だったらなぜ？

俺はあせりながら、警察官の言葉を待った。

6、ジョニーと情報屋（後書き）

ジョニーの服装が何かおかしかったのでしょうか？

いいえ違います。

ジョニーはごく普通の服装をして、回りに溶け込んでいました。

ではその警察官はコスプレ？

さすがにそれもありえません。いくら電気街でも警官のコスプレをしている者はいないでしょう。

ジョニーが失敗したのは、その行動です。

ジョニーがいるのは秋葉原。つまり千代田区外神田です。

近づいてきた警邏中の警察官は、ジョニーにこう言いました。

「路上喫煙禁止条例って知ってます？　ここは歩きタバコ禁止なの。すぐ消して」

秋葉原電気街は、万世橋警察署の目の前にあります。

千代田区の条例に明確に違反しているジョニーを、お巡りさんは見逃してくれないでしょう。

ジョニーは慌てて一服していた煙草を消しましたが、情報屋が彼に近づいてくることはありませんでした。

7、南国のジョニー

俺の名前はジョニー。超一流の殺し屋だ。

だが今日は殺しの仕事じゃない。

南の島でバカンスだ。

殺し屋にだって休息は必要だ。

むしろ殺人という集中力を消耗する仕事こそ、精神を癒すバカンスは必須のはず。

俺は南の島に船で行くツアーに参加した。

だがツアーに参加しといてなんだが、俺は団体行動が嫌いだ。

生まれてこのかた草しか食っていないようなサラリーマンや、喧しだけのババアと一緒にでは、せつかくのバカンスの楽しみも半減してしまう。

南の島に着くまでは船なので仕方ないが、着いてしまえばこっちのもの。

俺はうっとおしいインストラクターから離れて、単独行動をとることにした。

とはいえ俺は無人島でサバイバルする趣味も技術もない。

船が俺を残して出港してしまったら大変だ。

船が島を離れるあたりの時間になったら、戻るようにしましょう。

俺は南の島のつかの間のバカンスを楽しんでいた。

ふと空を見上げると、先ほどより天候が崩れてきた。

まずい。

非常にまずい。

もしかすると。

もしかして。

俺は今日。

死ぬかもしれない。

7、南国のジョニー（後書き）

ジョニーは南の島にバカンスに来ております。

正確にはサウス・シェトランド諸島のペンギン島。

西経57度、南緯62度にある南極海の島です。

ペンギンがたくさんいることからそう名づけられました。ちなみにイギリス領です。

サウス・シェトランド諸島は南極海にあり、80から90%は氷河に覆われております。

住むことは困難なほどに寒い島ですが、観光ツアーは実在します。

ジョニーは野生のペンギンを見て回る観光ツアーに参加したのでした。

殺し屋がペンギンを愛でるのはいいでしょう。

しかしツアーのインストラクターから離れるのはいただけません。

しかも天候が悪化しました。

この地での天候悪化は、即ちブリザードを意味します。

ジョニーにサバイバル能力は皆無ですので、もはや右も左もわかりません。

天候が回復するまで待つ技術ありません。

ジョニーは肌を切るような吹雪の中、勘を頼りに船まで戻らねばならなくなりました。

ジョニーは船まで戻ることが出来るでしょうか？

戻れなければ、ジョニーは南の島でバカンス中に凍死することになるでしょう。

8、危険な女

俺には理想の妻がいる。

料理好きな、家庭的な妻だ。

一昨日は餃子、昨日はハンバーグ、今日はピーマンの肉詰め。

妻の料理は最高だ。

おかげで俺は、ほとんどキッチンに入ったことがない。

だが俺は欲深い男だ。

家庭的な妻だけでは満足できない。

俺には実は、浮気相手がいる。

夕食は妻と共になければならないが、出張の帰り、休日出勤の夜などには欠かさず会っている。

彼女の危険な魅力にも、俺はめろめろだ。

だが最近、彼女とは会えていない。

本当に仕事が忙しく、彼女と連絡を取る暇がないのだ。

いっそ夕食を妻と共になければ彼女とも会えるのだが、それは危険だ。

妻は勘のいい女だ。

何かを感じずいて、離婚を言い渡されるかもしれない。

それは嫌だ。

炊事洗濯を全てやってくれ、料理も美味しい彼女と別れることは、俺には耐えられない。

浮気相手の彼女は危険な魅力を持っているが、そういった家庭的なことは何一つ出来ないのだ。

俺はぼんやりとテレビドラマを見ていると、喉が渴いてしまった。

「おい、ジュース。何かないか？」

妻を呼んだが、妻は風呂に入っているらしく返事がない。

俺は仕方なくキッチンに入り、冷蔵庫を開けた。

8、危険な女（後書き）

男の浮気相手のような、危険で魅力的な女性が、香水を使っていないことがありえるでしょうか？

炊事洗濯を全てやってくれる勘のいい妻が、その香水に気がつかないことがありえるでしょうか？

勿論、妻は夫の裏切りに気がついています。

そして妻は、裏切った夫に苛烈な仕返しをしています。

冷蔵庫の中で夫が見た者は、巨大な肉の塊となった夫の浮気相手でした。

一昨日食べた餃子。

翌日のハンバーグ。

今日のピーマンの肉詰め。

全て挽肉で作られる料理です。

何の肉を使ったかは、もう語る必要は無いでしょう

男が冷蔵庫を開けたまま腰を抜かしていると、妻がバスタオルを

巻いたまま優しい笑みを浮かべてキッチンに現れました。

そして妻は静かに冷蔵庫を閉じて、男に言いました。

「お台所のことはいいのよ。わたしに全部任せてちょうだい」

今まで感じたことのなかった妻の危険すぎる瞳に、男は何も言えずに小便を漏らしました。

9、熱川のワニ

熱川のバナナワニ園って知ってるかい？

今日は初めてそこに来たんだ。

10歳と6歳になる息子といっしょにね。

ワニって聞くと恐ろしいイメージだけど、ここのワニにはそういう印象はないよ。

みんなのんびりしててさ。温泉にいるお爺ちゃんってイメージが近いかな。

ゆっくり檻の中でくつろいでる感じた。

でもデカイし怖そうな格好だしで、息子たちは大喜び。

無理しても、なんとか来れてよかった。

一方で、俺は疲れてた。疲れ果てていた。

仕事が忙しくてさ。

実は昨日も、ほとんど寝てない。

安月給でこき使われる、悲しいサラリーマンなんだよ。俺は。

ベンチに腰掛けてると、上の息子が話しかけた。

「とーちゃん、園内をまわりたいんだけどいい？」

小学生の息子たちは、体力が有り余っているらしい。

動きの鈍い俺をおいて、園内を駆け回りたいうだった。

実は息子たちは兄弟仲があまり良くないので、俺はその申し出を喜んだ。

10歳の兄がいつしよならば迷子の心配もないし、俺も休める。

これを機会に2人が仲良しになってくれれば一石三鳥だ。

「ああ。じゃあこの携帯をもってけよ」

俺は息子に圏外にならない携帯を持たせた。

「うん」

「携帯が鳴ったら、ここに戻ってくるんだぞ」

「うん！」

息子たちは元気良く返事をして、駆けて行った。

これで安心だ。

俺はベンチの背もたれに倒れるようになり、空を仰いで一休みした。

………

……一休みのつもりが、いつの間にか俺は寝ていた。

時間もずいぶん経っているようだ。

俺は予備の携帯電話から、息子に持たせた携帯を鳴らした。

俺の真後ろの檻にいる巨大なワニの腹から、聞き覚えのあるメロディーが聞こえた。

俺は真っ青になった。

9、熱川のワニ（後書き）

さて。

先に言っておきますが、息子兄弟は死んでませんよ。

兄が弟をワニに食わせたとか、両方とも死んでるとか、そういったことはありません。

2人ともピンピンしてます。

あれ？ 仲の悪い兄が弟を檻の中に投げて……なんて思った方は、一度考え直すことをオススメします。

別に人は死んでいません。

ではそれを踏まえて、解説です。

まずバナナワニ園もそうですが、危険な動物を飼っている動物園の安全管理は非常に厳しいです。

子供が自主的に檻に入ろうとしても、そうそう入れはしないでしよう。

また動物の方も、餌を十分に貰っているので、わざわざ人間を食べたりはしません。

父親もそれは知っているのです、その点については心配はしませんでした。

ではワニの腹で鳴った物は何か？

もちろん父親の携帯電話です。

息子は『携帯が鳴ったら戻る』と言われたので、受けたと思った携帯を父親の見てない隙に檻の内側に投げました。

ワニはそれを、丸ごと飲み込んだのです。

ではなぜ父親が青ざめたのか。

息子に持たせた「圏外にならない携帯」とは、もちろん衛星携帯です。

かなり高価な製品です。

一方、父親は本人の申告通り、安月給のサラリーマンです。

そんな彼がわざわざ高価な衛星携帯を持っている理由は、もちろんそれが仕事上で必要だからです。

ワニの腹に入った携帯は、回収して使うことが出来るでしょうか？

まず不可能でしょう。

父親は再度、高価な衛星携帯電話を買わねばなりません。

いったい何ヶ月の小遣いがカットされるでしょうか？

また仕事上で会社から支給されているのであれば、事態はより深刻です。

支給の携帯電話を休日にもワニ園でなくしたとあれば、始末書は確実でしょう。

当然、先々の給料や出世にも響きます。

それを考え、父親は顔を青くしたのでした。

10、ジョニーと写真のターゲット

俺の名前はジョニー。殺し屋だ。

今日の依頼は、殺人理由としては最もありふれているものだった。

即ち、怨恨だ。

「この写真をご覧ください」

依頼人の男が、俺に写真を見せた。

血を流して倒れている少女の周囲に、5人の男女がいる。

「倒れているのは、わたしの娘です」

「この5人に殺されたのか？」

「いえ。歩道橋で足を滑らせて、階段から転落して頭を打ったのです。警察の方は、事故だと言っておりました」

「……あんたはそれを信じていない、と」

「いえ。本当でしょう。ドジな娘でしたので」

「そうか」

「ですが処置が早ければ、助かったかもしれないとお医者さんは言うのです。倒れている娘に、すぐに救急車を呼んで助けてもらえれ

ば、娘は助かったかも」

「……」

「娘が病院に運ばれたのは、心肺停止後でした」

「ほう」

俺は写真に写る5人の男女に、再び目を移した。

5人とも学生だろうか？

私服の高校生か、大学生か。

共通しているのは、全員がいやらしい笑いを浮かべるばかりで、病院や警察に緊急電話をしているように見えない点だ。

「彼らは、助けを呼んでくれなかった」

「そのようだな」

「いち早く救急車が呼ばれていれば、娘は助かったのに。助かったかもしれない娘の命を奪ったのは、彼らなのです！」

「なるほど。よくわかった」

「お願いします。私の貯金を全て差し上げます。何卒、娘の命を奪ったこの男女に、正義の鉄槌を下してください」

俺はその依頼を受けた。

断りがたいほどの金額を提示されたからだ。

俺は殺しのプロだ。

1人、また1人と、写真に写っていた男女を殺していった。

そして今日、5人目を殺した。

殺した女が、写真に写っている女と間違いのを確認し、俺は一息ついた。

そして俺はあるミスに気が付いた。

「しまった」

と言ったところで、どうにもならない。全ては後の祭りだ。

「……さて、どうしたものか」

俺は呟きながら、これからの苦難の道に思いを馳せていた。

10、ジョニーと写真のターゲット（後書き）

依頼人である父親の依頼内容はこうです。

「救急車を呼んでくれれば、娘は助かったかもしれない。重症の娘を放っておいた男女を殺してくれ」

ジョニーは依頼に沿って、写真にいる5人を殺しました。

ですがこの場には、もう1人だけ人物がいます。

写真を撮った人物です。

写真を撮った彼（彼女かもしれませんが）は、階段から落ちて重症の娘がいるのに、のんきにカメラで写真を撮っていました。

当然、父親の恨みの対象に入っております。

つまり写真に写っているのは5人ですが、ターゲットは6人いたのです。

服装や年齢を考えれば、6人とも知り合いか、もしくは誰かと知り合いである可能性が高いでしょう。

ですがもう、撮影者が誰かを知っている人々は生きていません。

ジョニーが殺してしまいました。

ジョニーはこれから、この写真を撮った者を探して殺さねばなりません。

手がかりは、ほぼゼロです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2306r/>

ショートショート集『不明の小噺』

2011年8月25日18時52分発行